

学校紹介

福島県立磐城高等学校



1. 沿革

明治 29 年	福島県尋常中磐城分校として創立
明治 34 年	福島県磐城中学校と改称
昭和 23 年	福島県磐城高等学校と改称
昭和 26 年	女子生徒 5 名の入学を許可
昭和 28 年	校是を「知性と責任」とする
昭和 30 年	女子生徒募集中止
昭和 38 年	夏の甲子園初出場
昭和 46 年	夏の甲子園準優勝
平成 8 年	創立 100 周年記念式典举行
平成 13 年	男女共学となる
平成 18 年	創立 110 周年記念式典举行
平成 23 年	東日本大震災が発生し、避難所や双葉高校サテライト協力校となる。
	平成 27 年度まで 5 年間、スーパーサイエンスハイスクール(以下、SSH)に指定される

2. 教育目標

- (1) 適性や能力に応じた進路実現のため、学習指導を充実させる。
- (2) 調和のとれた豊かな人間性を育み、伝統を継承するとともに、新たな学校文化を創造する。
- (3) 開かれた学校づくりを推進する。

3. 学校の特徴

各学年 320 名すべて普通科で、2 年次より文型・理型のクラスに分かれる。地区内の中学校でトップ層が集う学校で、入学者のほぼ 100% が四年制大学進学希望者である。

進学実績も高いが部活動も盛んで、県大会や東北大会で勝ち抜いて全国大会へ進出する部活動もたくさんある。今年度もラグビー部が 3 年連続して花園への出場を果たした。

昭和 38 年に夏の甲子園初出場を果たした際に、当時の校長は、「進学校でありながら部活動も活発な学校となるためには、文武両道の精神を持つことが必要だ」と話をされた。この精神を受け継ぎ、現在、多くの卒業生も各分野で活躍している。

生徒自身も先輩方の教えや活躍を見ることで、努力や工夫なしに実績を残すことができないことを感じとって「文武両道」の精神を貫き、どちらにも偏らないバランスを十分認識しながら、日々の勉強・部活動に励むよう心がけている。

このようにして、いわき地区のリーダー校として 100 年以上の伝統を築いてきた。

4. 本校で取り組んでいること

福島県などでは大手予備校の進出も少なく、学校で手厚く学習指導する体制となっているため、本校でも土曜日には延べ年 20 回の課外、長期休業中の課外、予備校講師によるハイレベルな課外を実施している。その他にも本校では、学力向上の条件の中に、自ら気づくことを提唱している。自分の社会に対する使命感、進路の自己実現のために、今何をするべきなのかということを集会や面談等で生徒へ訴えている。

本校の 1 年時には、総合的な学習の時間を SSH 総合の時間として大学見学・企業訪問を行っている。長い伝統のある 1 年生の応援練習や、マラソン大会なども重要な行事である。また、入学してすぐに高校生としての自覚や、クラスメイトとの交流を目的として 2 泊 3 日の学習合宿を開催し、そこで学習の仕方や問題演習などを行ってきた。ここ数年では、授業時数を確保して行事の精選をしながら、さらなる試行錯誤を進めている。

本校における SSH は「最先端の研究機関や大学との連携を密にし、科学技術に対する興味関心・探究心を高め、地域性を生かした研究を通して才能を伸ばし、国際化社会でも活躍できる人材を育成する理数系教育に関する研究」が課題である。

現行の数学科のカリキュラムでは、1 年生の全生徒が SSH 基礎数学を履修している。さらに理数系部活動に参加している生徒を中心に SSH 探究活動も行われており、ここでは日本を支える科

学技術者を輩出するために、多くの機会をつくったり、多岐にわたってサポートできるよう、学年ごとに数名の担当教師を配置している。

5. 数学科で取り組んでいること

- | | | |
|---------------|-----------|------|
| 1 年 | 数学 I | 4 単位 |
| | SSH 数学基礎 | 2 単位 |
| 2 年 | 文型・理型とも | |
| | 数学 II | 4 単位 |
| | 数学 B | 2 単位 |
| 3 年生は選択科目で行う。 | | |
| 3 年 | 文型 数学 II | 3 単位 |
| | 数学 B | 2 単位 |
| | 理型 数学 III | 5 単位 |
| | 数学 C | 2 単位 |

数学科では、授業の時間を有効活用することを目標とし、朝の時間を利用した課外学習や、平常時からプリントでの添削をしている教師もいる。

その他、学年内で進度を設定し、数学科会で確認しあう週間や、東北大学レベルを設定した学力テストも存在し、個人で作問をして科会での練り上げなども行うなどしている。教科書の章が終わる際には章末テストといわれる確認のためのテストが行われる。追考査は部活動との兼ね合いもあるため、放課後に実施する場合は月曜日に設定されるなど、文武両道の精神はこのようなところにも活かされている。

6. 東日本大震災レポート

(1) 地震・津波

平成 23 年 3 月 11 日…東日本大震災が起こった。

過去の地震の揺れは数秒で地震波が減衰したが、今回は大きな揺れと小さな揺れが繰り返し 3 分ほど続いた。職員室の棚からは書類が落ち、机の引き出しがほとんど開ききっていた。階が上がる毎に揺れが大きかったようで、3 階にある図書館の本は書棚から飛び出したほどだ。揺れの合間に校舎の外に出ると、近隣ではコンクリート片が落下したところがあった。校舎自体には損壊部分が見られなかったが、柔剣道場は破損箇所があり、数枚のガラスが割れていた。校舎外へ逃げる



＜損壊した格技場＞

際には落下物に対して改めて注意が必要だと思った。全校生徒が校舎からの避難となればパニック状態になったと思うが、高校入学試験の判定会議のため校舎内に生徒は一人もいなかった。

頻発する余震の中で初めに行ったのが、校舎内にいた職員と部活動中の生徒の安否確認である。小雪が舞う中の校舎前スペースに集合し、人数確認を行ったところ、考えられる人数の確認ができた。その後、緊急時の態勢づくりや保護者との連絡など、行うべきことを検討するが、3～4時間は固定・携帯電話とも制限がかけられていたため、連絡ができない状態が続いた。

しばらくしてテレビで宮城県や福島県の津波の状況が入ると、震源の場所や津波被害の甚大さを知り、テレビに釘付けとなった。よく知っている場所が、あり得ないほど大きな波に飲み込まれて押し流される光景は信じられなかった。いわき市の沿岸部にも生徒の家があり流失するなどした。

電気や水、交通手段も絶たれ、地震後の緊急性のある情報が入手できない状態が続き、こうした状況下で生徒や保護者の安否を確認するには数日を要した。その後、復旧の工程が発表され、停電は場所によっては1週間以上かかるところもあったが、早いところで3～4日、水道は液状化の影響もあり1ヶ月かかると伝えられた。本校生徒の40%が利用する常磐線は4月中旬まで不通となった。

(2) 原子力事故と放射能について

長時間に渡る震度4程度の余震が頻発する中、本校から40kmほど離れた福島第一原子力発電所の様子が報道され、その事故に震撼した。

地震・津波が連鎖し、福島を「フクシマ」と変えた原子力発電所の事故。

いわき市には3月11日から2週間程度20歳代から下の世代は殆どの世帯が避難していたが、政府が発表する20km圏内の警戒区域が「危険」で、40km圏内の本校が「安全」とであるという保証は全くなかった。また、本校から20kmの距離には福島第二原子力発電所もあり、福島第一原子力発電所の事故が起きたことで、恐怖を感じない訳はない。

テレビでは次第に「レベル7」と報道され、正しい情報がないまま逃げ惑う住民。被爆量がレントゲンや自然放射線量と比較されて報道されていたが、子ども達の将来の安全を保障する基準など存在しない。不明確な情報が不安を煽り、不安は不審を抱く。放射能は目に見えず、高濃度の被爆をすれば、その後に死も覚悟しなければならないため、外出や呼吸をするときにも気を遣った。

学校再開に向けての戦いは、放射線に対する理解から始まり、年間被爆量の値を知ることで安全性の確保に近づけることであった。地震や原発事故の再発などを想定した、放射線対策などを含めた学校の運営方針を保護者に説明すると同時に、学校再開へ賛同してもらうことからスタートした。しかし3月末から4月初までの職員会議で決定できることは何もない状況で、行事はおろか学校再開など考えられなかった。今後、学校が警戒区域になる可能性も否定できないし、今も立ち入れない地域に家がある生徒もいる。生徒はいわき市に戻って通学してくれるのか、不安がよぎる。

そんな中、子どもと保護者が少しずつ戻ってきて4月上旬に小中学校が再開した。

本校も例年より1週間遅れはしたが、学校を再開することができた。公的に認められている住民票の場所に人が住んでいないこと。役所が本来有るべき場所から100km離れていること。震災とその後の事故での影響は「考えられない」「信じられない」ことをたくさん作ってきた。放射性セシウムの半減期は30年となっているのだから学校が再開後も恐怖心は未だに消えることはない。

本校では警戒区域に居住する世帯の避難と放射能に対する考えで遠方へ避難した世帯があり、「安心」に対する基準が個々人で異なるため5月ごろには各学年10名程度が他県へ転校した。

(3) 伝わることと伝わらないこと

この機会に被災地から発信したいことがある。制限のあるテレビの中から見ることのできる範囲には当然限りがあり、実際に被災地を訪れないとわからないことが多い。

いわき市の沿岸部では辺り一面津波に流されて家の土台だけの場所がある。また、市内での放射能に対する判断基準は個々人に任されおり、生徒達の将来の安全は全く保証されておらず、「安全」という根拠は安心とはほど遠いところにある。その他、広い敷地に2週間程度で建てられた仮設住宅には等間隔に並んだ仮設住宅の外灯（蛍光灯）が灯っている。その中には自分の家があるにもかかわらず、自宅に帰れない方が多数避難している。こうした悲しさ、むなしさの混在している空気は、現場でなければ感じられないものだろう。

それに対して良く伝わることは、人との関わり合いであり、遠方からの心配や心遣いはよく伝わってくる。テレビを通じていても魂を込めた行動やコメントは心に伝わってくる。過去に全国大会で対戦した学校からの支援や応援なども多く寄せられ、多くの方々に支えられていることを実感した。

被災地では普段何気なく行っていた生活がまったく成り立たず、電気、水道などの生活の基盤となるものが使えなくなった。ガソリンも枯渇し、車で移動もままならない。そして、生きていくのに水は欠かせないが、水道の復旧には非常に時間がかかり、水の確保も深刻な状況であった。給水車が来ても水を入れる容器さえ入手できず、容器があっても水をもらう行列の中で被爆の心配も重なる状況であり、その安全性を含めて入手困難であったといえる。今回の震災を通じて、想定内の危機管理では役に立たないことが判明し、まさに生か死かの選択をさせられていた感じがする。

(文責：福島県立磐城高等学校 佐藤隆男)